

## 『俱舎論』 関係資料に見える北俱盧洲

本 庄 良 文

極楽依正の觀念の起源については、諸学者の説を含めて、藤田宏達『原始淨土思想の研究』（岩波書店 1972第1刷）が縦横に論じているところである。その中で藤田は「極楽の觀念ないし描寫が複雑であり、その起源を一義的に求めることができないこと」（同書 p. 473。また p. 502 参照）に注意を向けている。そもそも法蔵菩薩の誓願自体が、世自在王佛によって示された無数の佛國土の莊嚴を「攝取」（「選擇」）してのことであるという基本に立ち返ってみれば、そのことはおのずと首肯されるわけである。けれども、極楽の觀念に契機を与えたものとして、とくに重要なものはあるはずであって、藤田はそれらのうち、「轉輪聖王神話」「北クル洲神話」「天界神話」「佛塔の記述」に注目している。

北俱盧洲については、松本文三郎、望月信亨らが積極的に資料を集め（同書 pp. 491-494）、極楽の觀念との密接な関係を明示しているが、佛教論書の中での記述はあまり拾われていないようである。そこで本稿では、『俱舎論』におけるこの洲についての叙述を集成し、称友註、シャマタデーヴァ註『ウパーイカー』のなかの関連部分を適宜紹介して、より総合的な研究のための資料を提供したいと思うのである。

『俱舎論』において頻出する表現（平川索引、part 1, p. 197 によると 9 箇所）のひとつに「三洲において (triṣu dvīpeṣu)」というものがある。人間の住む洲（大陸）には、東勝身洲 (Pūrvavideha)、南瞻部洲 (Jambūdvīpa)、西牛貨洲 (Avaragadāniya)、そして北俱盧洲 (Uttarakuru) が挙げられるが、「三洲」の用例のほとんどが「北俱盧洲を除いての三洲」なのである。（唯一の例外は、業品第101頌の、破僧が南瞻部洲のみにある、とする説である。）このことは、『俱舎論』においてこの洲だけが、他の三洲と際立って異なった大陸であると見られた証拠である。そのおおよそのイメージは、「樂園であって悪意・悪行がないかわりに、そこに住む人間は苦を厭うことがありえないから、修行に励もうとする意欲がまったくない」というに尽きる。北俱盧洲は、人間界では最もすぐれた「理想郷」である反面、佛教修行にとってはま

ことに不都合な場所なのである。藤田 (p. 491f) が「四洲の中でも、とくに北クル洲を最もすぐれているとする記事」として肯定的にのみ言及するアングッタラ・ニカーヤ7,21 (vol. iv, p. 396) にも、肯定面・否定面の両者を読み取るべきであろう。そこでは、北俱盧洲の住民が「わがもの」との観念も、所有物ももたず、寿命が確定していることによって三十三天や瞻部洲の衆生に秀でているとされる一方で、瞻部洲の人間が、勇敢で、注意力があり、佛教の修行をする点で北俱盧洲の人間や三十三天の衆生に秀でているとされるからである。

### 【資料1】『俱舎論』および称友疏の記述

以下、『俱舎論』の叙述の順序通りに具体的に見ていくことにしよう。平川彰『俱舎論索引』I, 1973の中の, Uttarakuru, kaurava, triṣu dvīpeṣu の項目に依った。内容は、概要を示したが、以下に示す先学の和訳を利用し、私見によって変更した場合もある。

- ・櫻部建『俱舎論の研究』法蔵館 1975 第2刷 (界品・根品の和訳を収める)
- ・山口益 舟橋一哉『俱舎論の原典解明 世間品』法蔵館 1987 第2刷
- ・舟橋一哉『俱舎論の原典解明 業品』法蔵館 1987 第2刷
- ・櫻部建『俱舎論』大蔵出版 1981 初版 (定品の和訳を収める)

#### (1) 留捨寿行 (AKBh 44,5 ad AK, ii, 10a; 櫻部 p. 254)

寿命を自在に短縮・延長することは、「〔北俱盧洲を除いて〕三洲の人〔界〕のみににおいて、男・女の、不時解脱の阿羅漢であって、辺際の静慮を得たものの上にのみ〔あり得る〕。彼は三昧において自在であるし、諸煩惱によって〔その〕相続が支配されているのではない〔からである〕。」

#### (2) 無想果 (AKBh 68,24 ad AK, ii, 41d; 櫻部 p. 316)

「こ〔の広果天〕に生るべき〔有情〕には必ず欲〔界〕繫の順後受業がある。北クル洲に生るべき〔有情〕には必ず〔六欲〕天〔に生〕を受くべき〔業〕が〔ある〕如くである。」

#### (3) 自殺・他殺 (AKBh 75,3; 櫻部 p. 332)

北俱盧洲の人間には自殺も他殺もありえない。

## (4) 四洲 (AKBh 111, 12 ad AK, iii, 1cd; 山口・舟橋 p. 4)

北俱盧洲は四洲の一つである。

## (5) 洲の形態等 (AKBh 162,5; 162,10; 162,12; 山口・舟橋 p. 378)

北俱盧洲は一辺二千ヨージャナ、全周八千ヨージャナの正方形である (AK, iii, 55cd)。須弥山の北にある。そこに住む人間の顔は洲の形と同じく正方形である。北俱盧洲は、「クル・カウラヴァ」という小さな洲を従えている (AK, iii, 56; AKBh 162,5-12)。

## (6) 四洲の時刻 (AKBh 165,23 ad AK, iii, 60cd; 山口・舟橋 p. 393)

「もし北俱盧〔洲〕において夜半なる時は、東勝身〔洲〕においては日没なり。〔南〕瞻部洲においては日中なり。〔西〕牛貨〔洲〕においては日出なり。かくの如く餘においても亦理に随ひて思ふべし。」

## (7) 小千世界 (AKBh 171,13 ad AK, iii, 73; 山口・舟橋 p. 425)

「千の、四洲と日月と妙高山と欲天と梵世とを小千なり、となす。」

## (8) 身長 (AKBh 172,2 ad AK, iii, 75cd; 山口・舟橋 p. 428)

北俱盧洲の人間の身長は三十二肘である (瞻部洲は三肘半と四肘、東勝身洲は八肘、西牛貨洲は十六肘)。

## (9) 寿命 (AKBh 172,19=AK, iii, 78a; 山口・舟橋 p. 431)

北俱盧洲の人間の寿命は千年である (瞻部洲は十年乃至無量年、東勝身洲は二百五十年、西牛貨洲は五百年)。

## (10) 中天 (AKBh 176,2 ad AK, iii, 85a; 山口・舟橋 p. 441)

北俱盧洲の有情に中天はない。それ以外の四洲にはある。

## (11) 壞劫 (AKBh 178,18; 舟橋 p. 451)

壞劫の時、北俱盧洲の人間は悉く死歿して欲界天に生れ変る。離欲 (vairāgya) がないために欲界を越えられないからである。

## (12) 成劫 (AKBh 179,19; 山口・舟橋 p. 458)

成劫の時、器世間が出来てから、極光淨天より有情が死歿して梵宮、梵輔天、梵衆天、六欲天、乃至、四洲の人間、餓鬼、傍生、地獄へと順次に生れ変ってゆく。

## (13) 律儀・不律儀 (AKBh 226, 6-15 ad AK, iv, 43; 舟橋 p. 241-3)

不律儀は人間にある。但しシャンダとパンチャカと二形生とおよび俱盧とを除く。律儀もまた同様であり、および諸天にある。(AK, iv, 43)

「律儀があるその同じ者に不律儀も亦ある。相い対立してあるものであるからである。北俱盧洲のひとびとには受〔戒〕と三昧とがないから、また罪惡を造ろうとする意欲がないから、律儀も不律儀もないのである。…北俱盧洲・惡趣の諸〔の有情〕の、かの依身そのものは、塩田の如きかくの如きものであって、そのような依身においては、あたかも塩田においては穀物も蔓草も極端に〔発芽しない〕が如く、律儀も不律儀も発芽しない」。

## (14) 食欲について (AKBh 247,15; 舟橋 p. 361-363)

「たといすべて〔の欲界繫の渴愛〕が食欲であっても、すべて〔の食欲〕が業道なのではない。粗なる惡行〔のみ〕が〔業道の中に〕含まれるからである」と〔いう〕。諸の転輪〔王〕と北俱盧〔洲〕のひとびとの食欲までも、業道であってはならないからである。

## (15) 断善根 (AKBh 249,24 ad AK, iv, 79d; 舟橋 p. 373)

断善根があるのは人間のうちでも北俱盧洲を除く三洲においてである。北俱盧洲には惡の意志 (pāpāsaya) がないからである。

## (16) 業道 (AKBh 252,18; AK, iv, 82d-84; 舟橋 pp. 397-399)

北俱盧洲では(1)食欲、(2)瞋恚、(3)邪見は実際に起ることがなく、ただ成就(得)されるものとしてのみ存在する。順次、(1)わがものとして占有するということが無いから、(2)身心が柔軟 (snigdha) であり怒りの対象 (āghāta-vastu) がないから、および、(3)惡なる意志がないからである。綺語は実際に起ることがある。染汚心をもって歌うこともあるからである。惡なる意志がないから殺生等〔六業道〕はない。寿命が決っているから殺生はない。財物と女人とを占有することがないから、偷盜と邪淫と

はない。必要がないから、妄語・両舌・悪口はない。

女人を占有しないのになぜ邪淫があるか、といえば、男たちは性を享樂しようと思うときには女の腕をとって樹の根元にゆく。その行為が許されるものであれば樹がかれらを覆い隠すが、そうでなければ、覆い隠さない。その場合は、双方が恥じて離れる。(許されないのに手を引いた行為そのものが非梵行にあたると見做されるのであろう。)

欲界の、地獄と北俱盧洲以外では十不善業道が実際に起る。(AK, iv, 83b)

(17) 三障 (AK, iv, 96-97; 舟橋 pp. 438-444)

五無間業は業障、ねばり強い煩惱が煩惱障、悪趣・俱盧の有情と無想有情とが異熟障である。これらはすべて聖道と聖道の加行に属する諸の善根を障害する。

無間業は北俱盧を除いて三洲にある (AK, iv, 97a)。(称友疏 p. 426, 1.9: 北俱盧にないのは、寿命が千歳と決っているから殺生そのものがなく、性戒を有しているから、佛の教説がないからである。)

(18) 不浄観 (AKBh 339,1 ad AK, vi, 11cd)

不浄観は人間においてのみ生ずる。ただし北俱盧洲を除く。

(19) 順決択分 (AKBh 346,18 ad AK, vi, 21a)

四つの順決択分のすべては欲界の身に依る (AK, vi, 21a)。そのうち前の三は人趣の中、それも北俱盧洲を除く三洲のみで生ずる。(称友疏 p. 538, 1.3: 北俱盧洲の人は鈍根だからである。)

(20) 順解脱分 (AKBh 349,17 ad AK, vi, 25b)

順解脱分は人趣の中の三洲において引かれる。他処においては慧あるいは厭離がないからである。(称友疏 p. 541, 1.6: 北俱盧洲には両方がない。悪趣には厭離はあるが慧がない。天においては慧はあるが厭離がない。)

(21) 雑修 (AKBh 362,19 ad AK, vi, 42b)

静慮の雑修(有漏静慮・無漏静慮を互いに繰り返すこと)は最初に欲界の中の三洲においてなされる。

## (22) 無諍 (AKBh 417,13 ad AK, vii, 36c)

佛や不動法阿羅漢が起す「無諍」と呼ばれる智はただ人趣の三洲においてのみある。

## (23) 超等至 (AKBh 446,8 ad AK, viii, 18cd-19ab)

超等至に入ることのできるのは三洲における不時解脱の阿羅漢のみである。

## 【資料2】 俱舎論註『ウパーイカー』

チベット譯でのみ伝えられる、シャマタデーヴァ作の特殊な『俱舎論』註、『ウパーイカー』（大谷目録 No. 5595, 東北目録 No. 4094）は、俱舎本論が世品において有情の寿量（寿命の長さ）に言及するのについて、Āyuhparyanta-sūtra を引用する。この経には不完全ながら梵本があり、漢訳（佛說較量壽命經，大正 No. 759）およびもう一つの蔵訳資料が揃っている。松村恒は、以下に示すように、梵・蔵資料を校訂しており、その前には和訳も発表している。

・「梵文較量壽命經」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』第14号，1982，pp. (59)-(81)

・ HISASHI MATSUMURA, Āyuhparyantasūtra: Das Sūtra von der Lebensdauer in den verschiedenen Welten. Text in Sanskrit und Tibetisch, nach der Gilgit-Handschrift herausgegeben, Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen, 1989, pp. 69-100.

シャマタデーヴァは有部以外の部派資料を引くことが決していないので、この経は説一切有部に属すると考えられる。題名の如く、地獄から非想非非想処に至る有情たちの寿命を述べるものであるが、その中に北俱盧洲の環境と有情の描写がある。すでに発表したもの（「シャマタデーヴァの傳へる阿含資料一世品(8)一」『神戸女子大学文学部紀要』第29巻 pp. 237-246）であるが、『ウパーイカー』の関連箇所（北京版 Tu208a8-209a5）の和訳を以下に再録することを許されたい。

[8-10] 比丘たちよ、北俱盧〔洲〕の人間には「わがもの」〔との思い〕がなく、所有物もない。寿命は定まっており、寿命が尽きてからは、すぐれた趣、天に赴く。比丘たちよ、このような〔わけ〕で、北俱盧〔洲〕の人間の寿量は千年なのである。

時ならぬ死はない。

[11] そこで世尊はその時、次のような詩節をお唱えになった。

(中略)

(8) 隠し事ではない。これら〔の事実〕を見よ。

世間のどのような楽であれ、前世の布施の果報である。

(9) 北俱盧洲の人間は「わがもの」との思いなく、執着なく、  
最高の衣服を身に着ける。これは布施の果報である。

(10) かれらには病気がない。かれ〔ら〕には寒暑がない。

〔かれらは〕姿形とも申し分ない。それは前世の布施の果報である。

(11) 北俱盧洲では不浄もなく、〔身体の〕分段もない。

清浄な穀物が生育する。それは前世の布施の果報である。

(12) 宝珠の光がかれらを常に輝かし、美しくし、

かれらに食物を齎らす。それは前世の布施の果報である。

(13) そこには野菜は少しもない。豆などもない。

〔すばらしい〕色・香・味を具えた穀類を常に享受する。

(14) ひとつの器に摂られた〔食物〕は、〔人が〕座から起つまでは  
器の中で尽きることはない。それは前世の布施の果報である。

(15) 瓢箪のごとき実は他人に切られても枝からまた生え、

熟していなくとも（時をおかずとも）完熟している。

それは前世の布施の果報である。

(16) 八支を具えた浄い水があり、かれらには極めて冷たい河がある。

飲むとき〔体に〕障らない。それは前世の布施の果報である。

(16a) 音楽〔を奏でる〕樹木によつてかれらは常に歓樂し、

常に心は和んでいる。それは前世の布施の果報である。

(17) 音楽の木は美しく、衣服〔のなる〕木は数多く、

香木は満ち足りてゐる。それは前世の布施の果報である。

(18) 音楽、香、花、衣服を望めば、〔望む〕通りにそれは現れる。

(19) かれらの柔和な大地は (209a) 兜羅綿のごとくであり、

〔その上でかれらは〕常に愉しむ。それは前世の布施の果報である。

(20) かれらに怒りはない。互ひに戯れ、歓樂する。

ものおしみ、嫉みもない。それは前世の布施の果報である。

(21) 夜の初更に、一瞬の間だけ雨が降り、

塵を除く。それは前世の布施の果報である。

(22)かれらに所有物はなく、母は息子の顔さえも知らぬ。

憂いはなく、歓楽するのみである。それは前世の布施の果報である。

(23)母親が人気のない道に〔生まれたての赤ん坊を〕捨てて去ると、

指の先から乳が出る。それは前世の布施の果報である。

(24)だれかが死んでも、かれらは哭泣せず、捨てて去る。

〔北俱盧〕洲を〔鳥が〕嘴で綺麗にする。それは前世の布施の果報である。

(25)〔かれらは〕よく防御されていて、歌舞によって歓楽し、

遊戯する。それは前世の布施の果報である。

(26)人人は千年の寿命を尽し、

途中で死ぬ〔ことはない〕。それは前世の布施の果報である。

(27)人間の身体の利益と、莫大な富とに身を委ね、

天に生まれ変る。それは前世の布施の果報である。